
一つの終わり

工藤 まりも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つの終わり

【Zコード】

N4756A

【作者名】

工藤 まりも

【あらすじ】

親友だった正治の遺灰を故郷の土に返すため、俺は盛岡行きの新幹線に乗った。そして遠くに奥羽山脈を眺めながら死を誰よりも意識していた正治の言葉を思い出す。

盛岡行きの新幹線は休日にもかかわらず空いていた。

俺は前のシートに備え付けられている折りたたみ式のテーブルに左肘で頬杖を突きながら、自由席でも良かつたなど苦笑した。

のんびりと眺める窓の向こうには、奥羽山脈の頂に沿つて降り積もつた雪が例年より早い冬の到来を告げている。

遠くに見える自然はゆっくりと過ぎ去り、せわしなく行き交っているのは人工物ばかりだ。その風景はまるで時の流れを投影しているようにも感じる。

ありきたりすぎると思い直し、俺はさらに苦笑した。

そこへ、鉄道関係者特有の訛りが入ったアナウンスが流れる。どうやら盛岡に着くのは三十分後のようだ。

「もうすぐ帰れるぞ、正治」

冗談交じりにつぶやいて、懐から丁寧にたたまれた紙を取り出して開く。そこには達筆な字が整然と並んでいて、驚くほどきれいにまとまっていた。

とても、死ぬ間際に書かれたものとは思えない。

俺が盛岡に来た理由、それは無一の親友の遺灰を生まれ故郷の土に返してやることだった。

「なあ、正治。人間は何のために生きているんだろうな？」

俺はいつか正治にそう聞いた覚えがある。

「なんだよ、藪から棒に」

振り返った正治は、うさん臭そうにこっちを見た。

「物語の決まり文句で愛だとか恋だとか聞くけど、本当はなんだろうと思つてさ」

やれやれと正治は首を振る。

「そんなの、人によつて違うだろ」

俺は少し考え込む。

「じゃあ、正治は何のために生きている？」「当然の事を聞くな」

あの時の正治は微笑さえ浮かべていた。

「俺は、死に場所を見つけるために生きている」
その三ヵ月後、信号を無視して直進したトラックにはねられて正治は死んだ。

病室の一角に横たわる正治の誇らしげな死に顔と俺に宛てられた遺書は、正治の全てを語っていた。俺は正治の言葉を悟った。
この世界に正治はいない。だから、正治の抜け殻は自然に帰すべきだと、いかにも正治らしい言葉で綴られた遺書と遺灰を俺が持ち帰るのに、正治の遺族は何も言わなかつた。

恐らく、正治の死を一番受け止められなかつた俺に、心の整理をつけさせようと教えてくれたからだろう。

正治は、きっと死に場所を見つけたのだ。大きく言えば世界で誰からも愛されて死ねる場所を。

本当に、幸せな奴だ。

新幹線はゆっくりと減速し、盛岡駅の人々がまばらに立っている構内で完全に止まつた。俺は遺書を懷に戻して、遺灰の入つたリュックサックを背負つて立ち上がる。

「正治、お前の見つけた死に場所へ帰ろつ
俺は、否、俺達は北風の中を走り出した。

(後書き)

お初投稿です。工藤まりもです。
今回の作品は別のサイトに投稿した作品を少し書き直したものです。
割と現代を意識したつもりでしたが時代背景があやふやなのは悪しからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4756a/>

一つの終わり

2011年1月20日04時42分発行